

# 理趣経の性的表現と殺害容認をウパニシャッド等との類似性から定位しその仏教的限界と射程から即身成仏を確定する

善通寺教学振興会紀要 24 号

## 解題

ブリハッド・アーラヌヤカ・ウパニシャッド (Bhup) は最高の境地を比喩的に表すとき最愛の人との抱擁あるいは熟睡<sup>(1)</sup>で示す。中村元は「それ(最高のカーマとの抱擁)はインド人が憧れた理想の境地であった」と記す。その抱擁について、Bhup は「対象であるカーマがなくなり自他の分裂がなく、欲望を超克し罪業を消滅し恐怖を離れた姿<sup>(2)</sup>である」と説明される。対して理趣経(ここでは理趣釈の解釈をいう)は「妙適(抱擁)とは金剛薩埵であり無縁の大悲によって全衆生と接してその幸福を念願していてその境地は自他平等無二であるから妙適である<sup>(3)</sup>」と説き、両者に同じ構造があることを予想させる。

また Bhup に「ブラフマンは罪業消滅する」のみならず「悪業によってそれが付着することがない」と記される罪業不問の内容は理趣釈の「設害三界一切有情不墮惡趣(三段)」に類似性が認められる。

即ち、理趣経と Bhup は次の点で共通内容がある。

- ①最高の境地を抱擁で示す。
- ②罪業不問あるいは殺害容認。

さて、巷では妙適清浄句を解釈して、ブッダ以来の仏教が禁止していた欲望を肯定した点が画期的であると表現されるが、<sup>(4)</sup>そもそも最古の経のブッダは欲望を全否定している訳ではないのだから、そのような解釈は無意味である。確かにブッダの死後には涅槃を解釈してあらゆるカーマが消滅すること、それが嵩じてあらゆる想が消滅することであると解釈される。しかしそれは輪廻の苦を強調して「一切皆苦」を唱える人々の宗教であって、この世の苦を問題としたブッダご自身の問題<sup>(5)</sup>とは問題意識がずれている。あらゆる想=分別が無意味で排除されるべき仏教からすれば、抱擁どころか一切の人間生活が否定されるのであり、それは厭世仏教と呼ばれる非社会的仏教(非エンゲイジド仏教=観照仏教)である。この観照(鑑賞)仏教への批判は当初からあったのであり、その一端が衆生救済を唱える大乘仏教であったと考えられる。理由は大乘経典が慈悲による大衆救済を宣揚し、それ故に施薬院や悲田院や綜芸種智院や駆け込み寺にその実績が認められることである。

(1) 拙著「最古経のカーマを解明し無常無我空ではなく抜矢と共苦による平安説法を確定する」(善通寺教学振興会紀要 22 号)に参照

(2) BrhUp 4.3.21/tad vā asyaitad aticchando 'pahatapāpmābhayaṃ rūpam |tad yathā priyayā striyā saṃpariṣvaktō na bāhyaṃ kim cana veda nāntaram

(3) 以無縁大悲。遍縁無盡衆生界。願得安樂利益。心曾無休息自他平等無二故

(4) 金岡秀友師など多くの碩学が指摘され、欲望肯定の仏教として世間にも流布せられた。

(5) 拙著「仏教入門3・仏陀の内声・最古層の経典の変遷」。ブッダが衆生救済をされたことは古層経典でテーラターリーガーターに詳説されている。またサムユッタニカーヤには説法の可能性が慈悲と関して書かれる。

(6) 「武器を手にする経と死後を憂う経の比較により釈尊の原体験を特定する」(善通寺教学振興会紀要 21 号)

私はこの歴史的流れから見て理趣経は現世の苦をなくさんとする本来の仏教への回帰運動として捉える。しかしながら先に示したように②の罪業不問を併せて説くのであり、理趣経の問題は妙適問題のみではなく構造的に解明する必要がある。

ここでは、類似性が濃いウパニシャッドやギーターと比較しつつ、理趣経の構造を明確にして真言宗が説く即身成仏の教理に迫りたい。

## 構成

### 一、理趣経の Bhup 等との類似性

(一)、抱擁について (二)、殺害容認について (含むバガバット・ギーター)

### 二、類似性から見る構造

ギーター、Bhup、理趣経、ブッダ、ガナ・サンガ

### 三、構造比較から見えてくる理趣経

登場人物、教主、説所、自他平等

### 四、結論

即身成仏と問題点

## 一、理趣経とウパニシャッド等との類似性

### (一)、抱擁について

#### (1)、ブリハッド・アーラヌヤカ・ウパニシャッド (Bhup) の抱擁

抱擁の考察に入る前に Bhup が欲望についてどう考えていたかを見ておきたい。

##### 欲望の考察

Bhup4-3-38/ 臨終のとき全てのプラーナ（見る聞く思考するなどの機能）はアートマンのもとに集まるのです。Bhup4-4-2（そして身体から出て上方へ向かう。次に母体に戻るときはアートマンは氣息や機能を備えて）意識あるものとなり（savijñāno bhavati）、意識を持つものへと下ってきます（saṃjānam evānvavakrāmati）。知識と行為と記憶（vidyākarmaṇī pūrvaprajñā）はそれに背後からつかまっているのです。

Bhup4-4-4/ 例えば刺繍する女が刺繍の一部分をほぐして、別の新しい模様を縫うように、アートマンもこの世の身体（śarīraṃ）を捨てて無知（avidyāṃ gamayitvā）にしたのち、祖霊やガンダルヴァや神やブラフマンの、あるいは他の生き物の姿（rūpaṃ）をとるのです。

Bhup4-4-5/ アートマンはブラフマンであり、それは識別、思考（vijñānamayo manomayo）を持ち、氣息、眼、耳、地、水、風、虚空、光、非光から成り、欲望、無欲から成り（kāmaṃayo 'kāmaṃayaḥ）、怒り、怒りなきこと、正義、不正義から成る。それは人の行為に従い、行動に応じて、善をなせば善くなり、悪行をなせば悪くなる。さて、「この人間は欲望（カーマ）を構成部分に持つ」と言われる。彼は欲望したそ

のものを意図 (kratur) し、意図したものを行い、行ったものへと成っていく。

Bhup4-4-6/ (カーマ、欲望に) くっ付かれたものは、それに伴う思考 (マナス) がくっ付く生存 (場所・形態) へと、カルマを伴って赴く (欲望にしたがって思いが起こり想起されたところへと行く<sup>(7)</sup>)。 (欲望あるものは) 業 (の招く果報) の果てまでいたり、再びその世界からこの世へと業を積むためにもどる。

Bhup4-4-6/ 彼に欲望がないひと、彼は欲望が不在であり、欲望を消していて、欲望を満たして、彼が欲望しているものはアートマンのみであるその人は ('kāmo niṣkāma āptakāma ātmakāmo)、臨終に彼の諸機能 (プラーナ) は上方へ向かわずブラフマンに帰還する。 Bhup4-4-7/ 全ての欲望が放棄される時、死すべきものは不死となり、この世でブラフマンに到達する。 4-4-19/ この世には、ひとつひとつのものは一つもないと、意によって知るべきである。この世のものを、一つ一つ別のものがあると見るものは、死から死へと至る。 4-4-20/ この不滅、常住のものを、一体のものとして見るべきである。我は、付着なく、虚空をしのぎ、不生にして、偉大にして、常住なり。 4-4-22/ 彼は善業 sādhanā karmaṇā によってさらに増大せず、悪業によって減少しない。

Bhup (ヤージュニャヴァルキア) の大きな関心の一つが輪廻である。 Bhup は、欲望によって様々に考えるから、その思ったこと (=想=心に描いた姿=欲望の対象) へと人間は向かう (輪廻する) と考えた。同時に彼は、欲望し思考し行った行為、即ちカルマによって輪廻すると考えた。この①思考した物へと向かうということと②カルマが輪廻させるといふ二つのことは混乱している。なぜなら欲望がなくなった者が何故カルマを消滅させられるのか不明である。唯心論であればカルマは存在の余地がない。しかし Bhup がカルマを説くならば、カルマを消滅する方法を示す必要がある。

そこで考えられることは、ここでのカーマとは、欲望かつ欲望の対象かつカルマではないか。カーマ=欲望U欲望の対象 (色ではなく想) U (つ) カルマとなる。先走って一つの結論をいうと、理趣釈は、この①思考した物へと向かうということの変革と過去の罪業=カルマを無自性によって捨象することによって悟りを確保するのである。

### 抱擁の考察

Bhup4-3-20/ (夢を見る時は恐怖があるが熟睡状態では) われは神なり王なり、そしてこの世の一切であると思う時、それ (熟睡状態)こそアートマンの最高の世界である。 4-3-21/ これこそ、欲望を絶し、諸悪を滅し、恐怖をなくした、その姿である。あたかも愛する人に抱擁せられたる時、人は外に何をも感知せず、内にも感知しないが如く、これこそ、かのプルシャは、知るといふこと自体であるところのアートマンによって抱擁せられて、内にも外にも何物も感知しないのである。それは、まさにカーマ (欲望の対象) を獲得し、カーマがアートマンとなっている、そして求める対象としてのカーマが存在しない (a-kāma)、苦悩のない姿である。

4-3-22/ そのとき、父は父に非ず、母は母に非ず、それぞれの世界もそれぞれの世界に  
(7) リダ・ヴェーダ：10・129 ナーサッド・アーシーティア讃歌の世界展開そのものである。無あるいは有が欲望を起こし、欲望に従って思考が起こり、思考したところのものが次々と生れて、有は多になる。即ち一即多である。

非ず、諸神も諸神に非ず、ヴェーダも、盜賊も、胎児殺しも、チャンダーラもである。  
善の追隨も悪の追隨もなし。なぜなら彼はあらゆる心の悲しみを<sup>(8)</sup>超えたからである。  
4-3-23/ 彼の見るべき彼以外の第二のものは存在しない。4,3.31/ 他者の存在するときに、  
一は他を見得る。

Bhup では最高の境地は熟睡状態で示される。そしてそれが何故最高なのかは愛する人  
による抱擁で語られる。その内容は、渴望の超克 aticchando と罪業の消滅 apahatapāpma  
と恐怖の不在 abhayaṃ の三点である。

### 渴望の超克

- ① āpta-kāma/ カーマが獲得されている。
- ② ātma-kāma/ カーマがアートマンである。
- ③ a-kāma/ カーマがない状態である＝カーマの不在の三点である。

#### ① āpta-kāma/ カーマが獲得されている

ここで言うカーマは欲望ではなく欲望の対象であることに注意したい。カーマとは財  
宝であったり、王権であったり、田畑、奴婢、食物、宮殿など私たちが欲しがるものであ  
る。そして最大のカーマとして愛する人を提示する。ここで言うのはセックスの快樂では  
なく、最高の目的あるいはその一切を手にかけているということである。

#### ② ātma-kāma/ カーマがアートマンである

そしてカーマは対象物ではなくアートマンとなる。「4-3-21/ ブルシャは、知るという  
こと自体であるアートマンによって抱擁せられて、内にも外にも何物も感知しない」。

#### ③ a-kāma/ カーマがない状態である

知るということだけだけが残余していて外にも内にも求める対象物がなくなっている  
のである。ヤージュニャヴァルキアはこれを説いた後、「4-5-6/ 妻を愛するがゆえに妻が  
愛おしいのではない。アートマンを愛するがゆえに妻が愛おしいのである。実にアートマ  
ンこそ見られるべきもの、思考されるべきもの、そのときこの世の全ては知られるのであ  
る」

と語ってカーマ（妻）を捨ててアートマンの旅に出る。

### 罪業の消滅について

#### ① 自他の不在

カーマの不在のとき、父母貴賤自他の個別性（差別しゃべつ）はなく無二である＝自  
他の不在。一切は我である。父母などの関係性の不在。神と賤民貴賤の上下不在。盜殺の  
善人悪人の不在。存在の平等性。また 4,3.23/ には認識されるものがないと示されていて、  
対象の存在しない唯見る者、一切である者が示される。

#### ② 善悪の不在

自他の不在によって善悪がなくなる＝善悪の不在。福德の報復も罪業の報復もない。

彼は唯見るのだから善悪はない。しかしこの世の差別や盜殺や恐怖は存続する。彼アー  
トマンは無垢であるが、ブラフマンはカーマによる多様性の世界を含む世界の総体である

(8) tīrno hi tadā sarvāṅ śokān hṛdayasya bhavati/ この悲しみとは、愛するものの分離、高貴なるものとの不離、盜と殺の苦しみを示している。ヤージュニャヴァルキアにとっての苦とは、固体の分離と奪い合いぶつかり合いであったとすると、ブッダの苦と類似する。輪廻の苦と生存闘争苦を比較するとき、生存闘争苦の方が原初体験としてあったではないのか。

から罪業を含んでいるではないかという疑問が残る。

### 恐怖の不在 (a-bhaya)

「4-3-21/ 求めるもの（カーマ）が不在だから得ようとか拒もうとか齟齬することがなく、憂いがない」「4-3-22/ 貴賤盗殺の差別がないからあらゆる心の悲しみを超えている故に善悪に追従されない」。何かを求めるということが無い、また、何かを嫌うということが無いから苦悩が無いから、善悪の追従が無いと読むか。カーマを獲得して満足している故に、以前には父として存在していたもの（カーマ）が父でなくなり（アカーマ）、…盗賊が盗賊でなくなり…胎児殺しが胎児殺しでなくなる。つまり、カーマとして存在していたものの仮の自性である好悪や善悪が失われることによって、悲しみが無くなる。故に善悪の追従が無いのである。（しかし傍観者と被害者は個々に存在する。）

ヤージュニャヴァルキアの目的はブラフマンに至ることであるが、その内実は恐怖の削除であった可能性が大である。特に輪廻の生活に生きている人々にとってはアートマンの探求よりも日々の恐怖から解放されることが切実な問題あったことを留意すべきである。

#### (1)の結論

愛する人による抱擁は、セックス快楽や異性獲得という目的で語られているのではない。彼は妻を捨ててアートマン探しの旅に出る。つまり目的の内容を問うているのであり、カーマの目的物である男女抱擁の娯楽を捨てて目的をアートマンに移行せよというのである。先の Bhup4-3-22 の「心の悲しみを超えた」と併せて読むならば、以下に取り上げる理趣積の妙適清浄の趣意である衆生救済と目的の方向性が一致するのである。ただし Bhup では個別存在であることの苦がもう一つのテーマであることを忘れてはならない。なぜなら欲望によって、あるいは思考力によって多種多様なものが発生し、苦が起り、輪廻があると考えているからである。そのことは殺害容認思想の考察で詳説したい。

#### (2)、理趣積の抱擁

蘇囉多者。如世間那羅那哩娯樂。金剛薩埵亦是蘇囉多。以無緣大悲。遍緣無盡衆生界。願得安樂利益。心曾無休息自他平等無二故。名蘇囉多耳。由修金剛薩埵瑜伽三摩地。得妙適清淨句。是故獲得普賢菩薩位。(T1003\_19.0608b)

男女抱擁は妙適と漢訳され原語は su-rata である。スラタは男女の娯楽であるが、ここでは金剛薩埵であり、彼こそスラタである。その理由は、彼は無条件の大悲によってあらゆる衆生が安楽利益を得るように願っているからである。スラタと名付けられる理由は何かというと、彼の心はひとときも休むことなく自分と他人が平等無二であることを思い続けている理由による。金剛薩埵がヨーガする心境（サマーディ）を修するから妙適清浄の句を得る。そして普賢薩埵のくらいを得る。

後期密教では実際に男女抱合の儀式によって境地を獲得することも行われる。しかしここで語られるのは、大悲の心で一切衆生に接しながらその心は常に自他無差別の境地にあることがスラタであると明確に書かれている。セックスをしなさいとか、愛欲は良いと

(9) この表現は Sn4-15 のブッダに酷似する。

(10) 常住であり不増不減である (Bhup4-4-20)

か言っていない。金剛薩埵とは衆生救済以外のことを眼中に入れずひたすら大悲の思いで自分と他人が一体の気持ちでいるのだ、というのである。

この清浄句を説明して、(T1003\_19.0608b11)

圓滿者。由如上智能斷三界九地見道修道一切煩惱及習氣。斷二種障。二種資糧圓滿也。

是故諸契經。說三界唯心。由心清淨有情清淨。由心雜染有情雜染。

一切の煩惱とその悪果を生じさせる影響力を断ち二障を断ち福德円満である。

三界は唯心であり、心が清浄であるときは有情は清浄、汚れているときは汚れている。

つまり煩惱を野放しするのではなく断じているから円満であり、煩惱を断ち智慧を得て、善根を積み智慧を完成しているのである。また心に清濁の区別があり心は清浄であるというのである。ただし

常恒者。表如来清浄法界智。無始時來本有。處煩惱而不滅。與淨法相應。證清浄而不増也。

一切時者。在於異生時。後證聖果時。三業清浄猶如虚空。身語意業不被虚妄分別所生煩惱所染故也。

とあり、如来の智慧は煩惱に塗れても清めても増減がないとする。<sup>(11)</sup> また悟る前も後も如来の行いは虚空の如くであって身語意の三業は虚妄分別によって生じる煩惱に汚れないとする。この読み方によっては如来は何をしても分別しなければ善であるとする事もできる。それに対する反論としては、煩惱を断つという明言であり、大悲無休であるとし此処では主張するに留まり以下の殺害容認以降で再説したい。

## (1)(2)の抱擁比較結論

① Bhup も理趣積も両方とも抱擁の譬えによって自他平等の最高の心境を表わす。

② 両者ともカーマを捨てて高次のカーマを持つ。Bhup はアトマンをカーマとし、理趣積は衆生救済をカーマとする。成道後にはアカーマとなるのだが、両者とも修行中で話は終わる。Bhup は旅に出て話が終わる。理趣積は悩める衆生を救済つづけて終わりは語られない。

③ 両者がカーマを捨てて再度持つ理由は<sup>④</sup> 考えた物へと向かう (思ったものに成る) ことにある (Bhup 欲望の考察、理趣積由心清浄有情清浄)。

④ 自他平等を論じるには、自分の心境と他人の心境の存在を認める。此処に三種のあり方が想定される。以下の右辺平等は Bhup では歓喜、理趣積では大楽でもある。

① 自分の心境 = 平等、他人の心境 ≠ 平等。(自分、他者) (歓喜、不幸) (大楽、不幸)。自他平等を自分が思うだけであり他者の心境やその心境が外道かどうかの是非と無関係。

② 自分の心境 = 平等、他人の心境 = 平等。(自分、他者) (歓喜、歓喜) (大楽、大楽)。これは万人の幸福を意味し現実的ではないが、両者とも終着点としてこれを目指している。

③ 自分の心境 = 平等、他人の心境 ≠ → = 平等。他者を幸福にしようと思うだけではなく実際に働きかけて共に菩薩行を歩むことで願を持続する (以大悲無休息平等)。

(11) 相応部に如来の出現してもしなくてもこの界は存続すると説かれ、法界の常住と法界智の存在への萌芽がある。相応部-12 因縁相応-第20 経「縁」(paccaya) に「如来が出現してもしなくてもこの界は存続する。法は存在し法は決定され法は縁起する thitāva sā dhātu dhammaññhitatā dhammaniyāmatā idappaccayatā」

Bhup は私が一切になり自他の区別はない。そのとき他者は依然として輪廻のままである。というより認識（観照、知的優劣）によって全てが決まるのだから、他者の心とは無関係である。輪廻存在（理趣釈では三界的存在）そのものが業による幻影的存在であり不本意な存在である。Bhup には他者の苦境に対する慈悲はない。

理趣釈は①と③の読み方がある。

①の読み方。先に二種資糧圓滿が説かれる。金剛薩埵は智慧は灌頂で獲得する。福德は、ジャータカから読み解くとき、釈尊が輪廻で無数に衆生救済を行なうことによって福德圓滿した。それを修行することは無限の時間を要するから不可能だが、先の④思考した物へと向かう理論に従えばその果実をつまみ食いすることで解決する。釈尊が福德で得た心を自他平等無二とするなら、妙適とは正にその心を獲得して二種資糧圓滿することである。故に輪廻に苦しむ衆生を救済せずとも救済している心境を獲得すれば良いのである。正に三界唯心である。三界唯我心である。

③の読み方。自分と他人が平等で一切である。百字の偈に「菩薩」の利他行が強調されるから利他行の実践によって自他ともに涅槃していくと理解する。当然②を目指す道のは果てしない。

⑤アートマンと智慧は常住不変である。アートマンは不減不増、理趣釈に智慧は本有であり煩惱によって減少せず浄法によっても増加しない。それは上記③でみたように自分と他人が平等で一切であるから一切法に達成者と未達成者を含むからである。

## (二)、殺害容認について

### (1)、バガバッド・ギーター（ギーター）の殺害容認

殺害容認についてはギーターが直截的であるので参考にしたい。ギーターの主人公アルジュナが戦いに臨み、敵軍の中に親族を見つけて「親族を殺せない」として忌避したところクリシュナの説得によって参戦したことは周知である。この話はスッタニパータ第四章⑮経（Sn4- ⑮）のブッダの話に似ている。ブッダは「手に武器を取って恐れて」仏道修行することとなり、その原因である見えない矢を抜く。殺生しないアルジュナに対してクリシュナは説得する。クリシュナは、1.カーマを捨てることを説き、2.神への忠誠を説き、最後には3.自性<sup>(12)</sup>（svabhāva、仏教は無自性空を説く）によって定められた行為は罪にならないと説き、結局アルジュナは殺害を行う。自性<sup>(13)</sup>に従え、生まれや身分<sup>(14)</sup>に従えである。

ギーターは殺人を推奨までするのだが、それは条件付きといえる。その条件は、

①欲望の放棄→②神へのバクティ（忠誠）→③生まれ（svabhāva）による義務の遂行

(12) 47 śreyān svadharmo viguṇaḥ paradharmāt svanuṣṭhitāt.svabhāvanīyatam karma kurvan nāpnoti kilbiṣam 自性により定められた行為をすれば人は罪に至ることはない 48 sahaḥam karma kaunteya sadoṣam api na tyajet 生まれつきの行為はたとえ欠陥があっても捨てるべきではない

(13) 行為だけを評すると結局「各人の義務に従って行う行為は殺人でも奨励される」のである。ヨーガというのが実は誰か（権力者や神）に忠誠を誓って無私の境地で行えば免罪されるどころか表彰されるのである。これは先の論文で示したように、例えば国王が自分の権益を確保し拡大するために部下に兵役義務を課して、滅私奉公させることに等しい。1.私利私欲を断つというから潔癖なのかというと「兵隊さんよ我が儘を捨てて国家や国王に従え」というから誠に使いやすいのである。

(14) jāti/varṇa

結果として、神（国王や司祭）にたいして私心を捨てて武士は武士として人殺しをし  
ろというのである。これは昨年提出の論文の内容とすっかり一致するの(15)に驚嘆する。

## (2)、ブリハッド・アーラヌヤカ・ウパニシャッドの殺害容認

Bhup4-4-19/ この世に一つ一つ異なるものがあるのではないのだとマナスによってのみ  
知りうるのである。個々の物を見る者は死んで死を得る。

Bhup4-4-22/ 「非ず、非ず」として示されるアートマンは捉えられない。－それは把捉  
されないから。不壊である。無執着である。……『こういうわけで私は悪をなした』  
ということも『こういうわけで私は善をなした』ということも、その両方ともアー  
トマンを越えていくことはない。実にアートマンが善悪を越えていくのです。人が  
なしたことなさなかつたことがアートマンを焼き滅ぼすことはありません。(16)

Bhup4-4-23/ ブラフマンを知るものは偉大さは行為によって増減がない。それを知れば  
罪の行為によって汚れない。…… 罪が彼に打ち勝つことはなく彼が全ての罪に打ち  
勝ちます。

欲望して思考があり、思考するから（本来は一つであるのにそれが思考によって仮に  
現れた）個々の物に分化する。ある意味でカーマが顕現するのである。逆に欲望を停止す  
れば個々物（bahu,nānā）はなくなる。個々物の存在を持たないアートマンはただ知る存  
在であり把捉されないからカルマによる輪廻から自由である。善悪から自由である。

アートマンを知って唯知る存在となれば、カルマが云々ではなくて即解脱なのである。  
それはカルマや福德に左右されることがなく、即身成仏に等しい。

### では唯知る存在者がいかにして行為を持ちうるのか

Bhup4-4-5/ アートマンはブラフマンであり、それは識別、思考（vijñānamayo  
manomayo）を持ち、氣息、眼、耳、地、水、風、虚空、光、非光から成り、欲望、  
無欲から成り（kāmamayo 'kāmamayaḥ）、怒り、怒りなきこと、正義、不正義から成る。  
それは人の行為に従い、行動に応じて、善をなせば善くなり、悪行をなせば悪くなる。  
さて、「この人間は欲望（カーマ）を構成部分に持つ」と言われる。彼は欲望したそ  
のものを意図し、意図したものを行い、行ったものへと成っていく。

Bhup4,4.13/ アートマンを確認（pratibuddha）した人は万物の創造者である。彼は一切  
をつくり出す。世界は彼のものである。否、彼が世界であるからである。

Bhup4-4-23/（ブラフマンは）行為によって増大もせず減少もしない。

アートマンはブラフマンに成る時点で大転換する。アートマンが一切であるというど  
き既に大転換は起こっている。彼は善も悪も全てを含む。そしてあらゆるものをつくり出  
す。しかし把捉されないから善悪のカルマを受けない。

①アートマンを知らない人は善悪の果報を受けて輪廻して苦を受ける。

その理由は人は思ったものへと成るからである。

②知る人はブラフマンと成り一切をつくり出して善悪を問われない。

(15) 「最古層経の無記無分別を解明しブッダの科学的思考と平等の趣意を解く」（普通寺教学振興会紀要 24 号）

(16) 服部正明訳参照



その理由はブラフマンは不増不減であり無垢であるからである。

ここには、ブラフマン世界と輪廻世界の二つの二重世界がある。仏教でいうなら出世間と世間（真諦と俗諦）である。ブラフマン世界は善悪を含み一切であり無垢（カルマから清浄）である。それは不増不減であり罪行によって無垢である。

### (3)、理趣積の殺害容認

#### 実際の殺害容認か

理趣経初段 / 若有聞此清淨出生句般若理趣。乃至菩提道場。一切蓋障及煩惱障法障業障。

設廣積集必不墮於地獄等趣。設作重罪銷滅不難。若能受持日日讀誦作意思惟。即於現生證一切法平等金剛三摩地。於一切法皆得自在。受於無量適悅歡喜。

理趣積三段 / 若有人聞此理趣受持讀誦設害三界一切有情不墮惡趣爲調伏故疾證無上正等菩提者。害三界一切有情。一切有情者。由貪嗔癡爲因。受三界中流轉。若與理趣相應。則滅三界輪迴因。是故害三界一切有情。不墮惡趣。爲調伏貪等三毒也。故得速證無上菩提。

初段は過去の罪業が消滅するという意味か。

三段は他の理趣経類本が害を殺害と書き「一切有情をたとえ害しても地獄に堕ちず調伏となるから速に菩提を証す」と読むのが普通であるが、理趣積は「害三界一切有情。一切有情者。由貪嗔癡爲因。受三界中流轉。若與理趣相應。則滅三界輪迴因」として「害」の作用は「若與理趣相應。則滅三界輪迴因」であり、害とは有情三毒に理趣相応させて有情流轉の因を滅することと説く。害は理趣相応の意味であって殺害とは限らない可能性がある。理趣積の解釈は「たとえ有情を害しても地獄に堕ちず（そのことによって有情の三毒は理趣相応して流轉の因を失くし）三毒が調伏されるから速に菩提を証す」と読むのが素直に思える。このとき不墮惡趣と証無上菩提の主語は修行者でもあり敵でもあっても良いのではないか。その理由は初段で修行者は金剛薩埵として妙適の境涯にあり衆生救済自他平等無二であり、また趣積初段に「三界唯心。由心清淨有情清淨。由心雜染有情雜染」であるからである。理趣積は理趣経では「殺害」と読む「害」を「理趣相応」に読み替えたのではないか。害とは殺害という意味ではなく理趣を分からせるための不殺生戒以内での積極的活動と取りたい。その理由はもう一つ直前の文にある。

㊦修行者欲降伏三界九地煩惱怨敵故。誦此當部中五種無戲論般若理趣。欲降諸天頻那夜迦。及惡人危害佛法者。運心入五種無戲論瑜伽三摩地。自身作降三世瑜伽大智印。與四印相應。誦一字明。相應入實相。理趣義同前。

有客塵煩惱習氣なる惡人が仏教徒に危害を加えようとしたとき、降三世の憤怒の形相をして印と明をなして実相に入り、「五種無戲論般若理趣」を唱える。既に初段に於いて金剛薩埵となって妙適の大悲によって自他平等無二の心境にある修行者は降三世の実相に入り五種無戲論を説くのである。このように読むならば実際に修行者が殺害に至るとは考えられない。とはいえ、先の文章㊦は時代的に仏教が迫害を受けている様相であり、自衛

(17) 理趣分等。

としての正当防衛や先制自衛としての行き過ぎた殺害容認の疑いも残る。

### 理趣相応の機序。一切法は自性清浄か無自性か

では、理趣相応によって敵が調伏される機構は何か。理趣経には「一切法自性清浄故。般若波羅蜜多清浄」と説くのに理趣釈は「一切法清浄→客塵煩惱→獲得瑜伽理趣四種智印→相應方得離垢清浄」とあり、理趣四種智印に相応して清浄となる。梵文は「sarvadharmāh svabhāvaviśuddhāh sarvadharmasvabhāvaśūnyatayā prejñāpāramitāviśuddhir bhavati」とあり理趣分は「以一切法自性空故、自性遠離。由遠離故自性寂靜、由寂靜故自性清浄、由清浄故甚深般若波羅蜜清浄・・・是菩薩句義」。藏訳理趣広経と略経は「一切法は自性清浄にして、一切法は自性空性なるが故に、般若波羅蜜は清浄である」とする。理趣分は類本の原点でありその論理は「空→清浄」であるから梵文の訳は「一切法は空性であることによって一切法は清浄である。故に般若波羅蜜は清浄である」としたい。

しかし一切如来（一切智智）を起点とするなら一切法清浄が空より先に成立する。

### 理趣相応の理趣とは何か。欲望の全開か忍耐か

三毒とは貪、瞋、癡であるが、それは初期仏教では「好ましいものを奪い、好ましくないものを排除し、快樂を維持したいという、奪う、殺す、保身の三悪欲<sup>(18)</sup>」である。奪い合い、殺し合い、快樂に浸るといふことである。

大日経疏第十に「如佛常教。以慈對治於瞋。以無貪治貪。以正見治邪見。今乃以大忿瞋而除忿瞋。以大貪除一切貪。」とあり、常の仏教は瞋を治すのに無貪に依るが、ここでは大忿瞋に依って忿瞋を治し大貪に依って一切貪を治すとする。この説に依れば、三毒には悪い三毒と善い三毒がある。貪は苦を招くが大貪は貪を治して大樂に至るのである。この思考方法も先の「一切法は清浄か無自性か」の問題である。貪が大貪となり瞋癡（癡＝偽の樂＝苦）が大瞋大癡（大樂）と変化するなら一切法は無自性である。もともと一切法清浄だから（貪→大貪）（貪＝大貪）であるというのは無理がある。三段の理趣は「五種無戲論般若理趣」であり、それは単なる三毒ではなくて、大貪大瞋大癡である。何故大が付くかという、修行者は初段にて既に金剛薩埵として大悲によって衆生救済を大願し自他平等無二の心にあるからである。では何故、欲無戲論性というのか。先ず、

理趣経二段で理趣経二段 / 一切業平等現等覺。以大菩提一切分別無分別性故。

理趣釈二段 / 現三業化。於淨妙國土及雜染世界。任運無功用無分別。作佛事有情事

大菩提は一切の分別が無分別であると読むのか、あるいは大菩提は一切に分別と無分別をもつと読むのか。これについては既にサムユッタ・ニカーヤ(SN)で議論されている。

1-3-4/ (先ず神が言う「あらゆることから心を制御 nivāraye せよ。ならば苦から解脱する」。それに対して尊師がいう。)  
「心 mano をあらゆる事柄から制御するべきではない。自制された心は、抑制すべきではない。悪の生じるその時その時に応じて、

(18) 「初期仏教」(岩波新書)馬場 紀寿(著)で馬場先生は、韻文を含む Sn 四章や SN 有偈章が最古層であるという中村先生や荒牧先生の説を退けて、これらは主流に混入した傍流であるとするが、私は先の論文で両先生の論を立証した。ただし現仏教が平川先生が立証した転法輪経にあることを否定しない。

(19) 1-3-5 真に力ある者は表現として語る。4-2-4 人のために思い哀れむから説法する。順応と反論から解脱しているから。10-2 (サッカが言う「あらゆる把握 gantha を止め、汚泥の束縛から解放され、気をつけている修行者が他人を教化することは良い事ではない」。尊師がいう。) 如何なる理由で他人と共に住むとも、智恵あるものは、同情するために心で教化してはならない。しかし清らかな喜びの心で行うなら、その教化は束縛 samyutto にならない。同情 anukampā であり愛憐 anuddayā である。

適時心を制御すべきである。

つまり衆生救済に対して三つの意見が在る。

①涅槃を完成した者は、衆生救済のためにその衆生の心境である苦境を分別するとその分別によって汚れる（また、善行を行ってもそのカルマで天界に赴く）から分別してはならない。つまり「①一切の世事に関わるな」。

②そうではなくて適宜に分別と無分別を繰り返す必要があるのである。そうでないとブッダが説法できたことが説明できない。またブッダ以外の弟子も修行中の説法ができるのである。このように理解すると、「一切分別無分別性は菩薩の性格として全てを理解するのに適時に分別と無分別を行う」と読める。

③四段に六趣に不被一切煩惱染汚。その理由は般若波羅蜜清淨。つまり般若の智慧は六趣に遍歴しても垢を受けない。その理由は無分別 (a-vikaipa カルパ) である。最古の Sn4- ⑮の大洪水の偈にこのカルパは初出で「欲望の種類に応じてカーマを生み出すこと」である。内容としてはあれこれと出会ってあれこれと定立すること。選び取って決定することである。智慧の決断簡拙の義と同様であるのに愕然とする。凡夫の決断簡拙は分別(妄想)であり、如来のそれは智慧なのである。大洪水の比喻から考えると、悪しき欲望は悪しき分別を生じ、善きは善きを生む。ということは金剛薩埵の大悲という欲望に依って生じる分別は良い分別である。良い分別も輪廻の因となる。大悲が欲でなく

仏智であるならそのカルパは無分別の範疇である。

また、古層の Sn4- ④経には「固定思考から自由で一切法に熟達した智者 bhūripaṇño を誰が分別させようか vikappayeyya」とあり教理を保有しない智者は分別することがないという意味で無分別である。

### そして三段が説くのは無戲論である。

戲論は一般には「正しくない無益な言論」であるが、語源が「pra-pad = 広がっていく」であり、初出は Sn4 ⑪経である。妄想分別(カルパ)によって空間が広がることを意味した。ここでは欲が虚妄に広がらないという意味に取れる。七段には一切無戲論如来が空無自性を説く。どの法も無自性だから無戲論である。私論では欲無戲論性とは煩惱に向かって広がりを持たないものである。煩惱に向かわないとは涅槃を維持するということであり、それはそのまま戒律を守ることでもある。つまり不殺生を守ることである。涅槃を壊さない調伏は良いと言っているのである。なぜなら修行者は既に初段に於いて金剛薩埵と成り大悲に依る欲が即ち大欲でありそれは欲無戲論性を既に確立している。大欲から起こる大瞋とは敵を敵視するのではなく敵をあたかも自分であるかのように観ることであり、大癡とはひとり涅槃に遊ぶのではなく敵とともに自他平等無二になることであり、その表現が瞋無戲論性であり癡無戲論性である。

もしも欲無戲論の意味が欲は無前提に放任されるという意味であれば、どうして敵の欲は認められないのかという矛盾が起こる。欲に三種類あることになる。

①妙適の欲②菩薩行調伏の欲③外道の欲であり、①と②は認められるのに何故③は認められないのかという矛盾である。理趣相応ならば全て認められるということになり殺害

も可となる。

そうすると「欲無戲論性故」の読み方はどうなるか。

「欲に三種ありその内の二つは悪欲を退治するものでありその意味で必ずしもカーマを促進するもの（pra-pad）として排除すべきものではないという意味で無戲論である」ということか。しかしここでもう一つ問題があるのである。というのは初段に「三業清淨猶如虚空。身語意業不被虚妄分別所生煩惱所染故也」とある。そもそも三業は煩惱に染まらないと考えられている。ならば何をしても流転しないのである。なのに有情は三毒を因として流転している。これも論理矛盾である。

ここで三業とは有情の三業は含まずビルシャナの三業のみと考えると辻褄が合う。如來の貪欲による行いは清淨であって、しかし有情のそれは不淨なのである。先に示した Bhup<sup>(20)</sup> の論理が当てはまる。同じことをしてもアートマンを知るものは無垢であり、知らざるものは死に至るのである。ヤージュニャヴァルキアは財宝も邸宅も愛妻も捨てて遊行に出たのだから潔癖であり人畜無害である。しかし降三世は魔醯首羅と烏摩妃を踏みつけて悪人を懲らしめて良いのかという疑問が起る。これでは麻原オーム真理教のポア行為<sup>(21)</sup> に等しい。

そもそもカルマとは行為であって身と言葉と心の営みをいう。確かに Bhup は「（アートマンは）知るのみ」として行為の回避に成功している。理趣経はどうか。問題の鍵は理趣初段「三界唯心。由心清淨有情清淨。由心雜染有情雜染」にあるか。三界に心しかないとする、身と言葉の業は存在しない。しかし三業は虚空の如しというのだから二業も存在すると明言している。この思考方式はブリハッド・アーラヌヤカ・ウパニシャッドと同様であり、第一段階としては心のみが存在し、次の段階では二業が追加して存在する。だから第一段階の存在であるビルシャナ仏あるいはその化身である降三世は何をしても汚れることがないが、有情は汚れて流転する。ところが金剛薩埵は汚れないのである。その理由は理趣を誦するからである。理趣の根幹は金剛薩埵の妙適であり衆生救済であり三毒の調伏（退治）である。衆生の三毒を退治するのが必須とはいえ、殺害が認められないことは戒律から自明であり、実際に殺害が出来るはずはないが、金剛薩埵が曼陀羅に留まらず世間に出るならば殺害に遭遇することが案ぜられる上ではその事実を認めたものかもしれない。

以上見たように、欲無戲論性とは金剛薩埵の妙適という衆生救済の欲であり仏の欲を言い換えたものである。それは種々雑多な善惡諸欲を大欲に限定し特化したものである。しかし一切如來あるいは大ビルシャナは一切の清濁を呑み込んで一切法である（それはブラフマンの構造と同じ）。だから一切法清淨であり三毒清淨である。三毒は一切如來の一部なのである。だから無戲論性と表現される。しかしその真意は百字の偈に明記されるように妙適という大欲によって衆生救済を積極的にするということである。一切法清淨に胡座をかくのではなくて無自性空に汗をかくということである。

(20) これは先に批判した和辻哲郎の主知主義に通じる。知っていれば悪行も許されるというのである。

(21) 地下鉄サリン事件

そもそもブッダは説法をしたし、サムユッタニカーヤ (SN) 1-3-4<sup>(22)</sup> のように衆生救済のために適時分別することは涅槃に障りがないことは理論上認められている。しかし SN の後半になって悪行はもとより善行も天界に趣く因となるとして善行も排除されたことと、ルーパを持つこと即ち身体を有することがそのまま苦であるという一切皆苦の思想が流布して完全な厭世仏教が成立しあらゆる欲望が否定される。しかしその萌芽はウパニシャッド思想にあるのである。この点は既に Sn 第五章から仏教のウパニシャッド化は急速に進んでいる。

## (1)(2)(3)の殺害容認の結論

(1)ギーターは、戦争において私が殺さなければ敵に殺される状況で私が敵に慈悲を感じた場面での殺害の是非である。この状況は先述の最古の經典 Sn4- ⑤の冒頭のブッダと同じである。ブッダは宗教運動で治外法権的なサンガを形成し出家という仕方で不殺生を果たした。アルジュナもブッダも種族の指導者という立場であったが、アルジュナはクリシュナに帰依してその命令の下に殺害する。<sup>(24)</sup>その命令とは自己の自性を義務として果たすことである。自己の自性 (svabhāva) とは生まれ (jāti) = 身分である。ブッダは自らクシャトリアという自性を否定してカースト (ヴァルナ) 外に出たのである。私と敵の平等 = 大悲 (人の痛みを知ること) に重きを置けばブッダとなり、差別を容認するとアルジュナになる。理趣積の金剛薩埵は大悲と平等を基調としてブッダと重なる。大悲の根拠は無自性であり平等の根拠は自性清浄である。理趣積を採用した空海聖人が標榜した無自性故去卑取尊とは正に生れの否定であり出自や身分による差別の否定である。

(2)ヤージュニャヴァルキアは二つの点で悪業の影響を受けない。一つは、①カーマの不在による無苦である。唯見る者となる時我と敵、上下差別、好悪、などの対象 = カーマが消滅するから個別性が消滅し胎児殺しや盗賊の罪行が無くなって苦悩がなくなる。もう一つは②アートマンは不壊、無執着でありブラフマンは不生、常住、不増、不減であるから、善悪の影響を受けない。此処には明確に二つの別世界が在る。一つはブラフマンの世界であり、もう一つは虚妄な輪廻の世界 = 娑婆世界である。

前者を出世間、後者を世間と呼ぶならば、ギーターとブッダは世間で説く。Bhup の上記二点の内、①は世間のことであり、②は出世間のことである。①のアカーマであることは自他平等無二であって、ブッダの一切所平等平安に等しく、即身成仏である。①で既に苦の消滅は成功しているのである。このとき殺生はなされない。ところが死後彼はブラフマンに至るのが②である。②ではブラフマンは一切の存在を含むから(後に説く大ビルシャ

(22) 1-3-4/ (先ず神が言う「あらゆることから心を制御 nivāraye せよ。ならば苦から解脱する」。それに対して尊師がいう。)「心 mano をあらゆる事柄から制御するべきではない。自制された心は、抑制すべきではない。悪の生じるその時その時に応じて、適時心を制御すべきである。

(23) 拙著「仏教入門3」p96、SN5-6 で一切皆苦が確立してくる

(24) 平川彰「原始仏教の研究」p20

(25) おりからオウム真理経事件の加害者多数の死刑が執行されたがその経緯において麻原グルがポアという教理を展開したという指摘がある。坂本弁護士らを殺害した。この犯行の原因は麻原グルが修行中に死んだ真島さんの真相を隠すために口封じしようとしたことが主である。しかし殺害を実行した信者は「グルは絶対であり」、「殺人を含めグルが命じたことをすべて行なうことが解脱のための功德となる。」「死ぬ時期に来ている者を弟子に殺させて高い世界へ生れ変わらせるための救済が、則ちポアである。」という「虹の階梯」を下敷きにしたもの」という麻原の説に基づいて行為をなした。正にクリシュナに従うようにグルに従った。

ナと同じく) 殺人者等を含み、その罪業を許容しつつも、その影響を受けないのである。

(3)理趣釈は出世間の一切如来の指示を受けたビルシャナに灌頂された金剛薩埵が世間で説く。金剛薩埵は大悲によって衆生と自他平等無二でありその救済は大貪大瞋大癡で行う。それが三段で説く貪瞋癡の無戲論性である。金剛薩埵は救済を発揮するために時には憤怒などの方便を行うのである。この貪瞋癡は戒律を超えず涅槃を損なわないから殺生を行う筈は無い。しかるに大ビルシャナ世界は世間と出世間の全てを包含する。つまり盗殺を含む世間の全体である。故に大ビルシャナは三毒を包含しつつ清浄である。此処には Bhup との全くの類似がある。ブラフマンの世界と一切如来の世界(金剛界)は共に完全無欠の世界であるから汚れを包含しながら清浄であるということである。

ギーターが自性に従い殺害するのに対して、理趣釈は自性清浄と無自性<sup>(26)</sup>の二種を説く。自性清浄とは一切の殺害を認めないことでありながら却って罪業を含む。無自性とは空海師が「無自性故去卑取尊」と記すように凡夫が成仏する根拠である。故に凡夫の私が金剛薩埵に成ることが出来るし、殺害者は無自性故に非殺害者に变化可能である。怨敵であっても無自性故に理趣相応すれば即座に菩提を証す。つまり折伏の可能性が開かれている。そこに害の入り込む余地がある。しかし実行としての殺害は説かれないし、金剛薩埵として敵と自他平等無二に心があるなら殺害には到らない。それが無戲論性の謂いである。

## 自性 (svabhāva) とは生まれ (jāti) の問題

以上見たように、自性清浄と無自性<sup>(27)</sup>の問題は深い。理趣釈二段「證得四種圓寂。所謂一者自性清浄涅槃。二者有餘依涅槃。三者無餘依涅槃。四者無住涅槃」は興味深い。仏縁のない悪人でさえも既に自性清浄涅槃はある。涅槃にほど遠い涅槃が自性清浄で示される。如来から見れば清浄だが、衆生から見れば盗殺である。それは加害者から見れば快樂で被害者から見れば苦痛という事態と類似ではないのか。それでは有情の苦を見て苦惱する菩薩に反する。まるで蜘蛛の糸の「お釈迦様」ではないか。

無住涅槃を証するビルシャナの在所は一切所<sup>(28)</sup>である。それは一切如来であり全世界を網羅していて敵を含む。それは悪い意味ではなく、金剛薩埵の自他平等無二に起因する。この心からは一切有情悉有仏性である。仏の境涯は唯我独尊ではなくて自他平等尊である。だから「三界唯心。由心清浄有情清浄」である。三界に敵なしである。一切衆生の生まれを問わず、過去の罪を問わず、未来の涅槃を確信するという意味で一切法自性清浄だと二段には言い切っている。それこそ先の Sn4- 15 のブツダが説く一切所平等平安である。だから欲無戲論性である。自分の欲も他人の欲も煩惱へと広からず平等無二を高めればその範囲で欲は大欲であり、大欲こそ釈尊が衆生救済した発心である。自性清浄は悪人は一人も居ないという意味であり、無自性はどんな人でも涅槃が可能であると説く。但し去卑取尊ならばである。

(26) 自性清浄は基本であり、無自性は七段に説かれる。

(27) 自性の出典は、二段「法平等現等覺。以大菩提自性清浄故」「説一切法自性平等心」四段「得自性清浄法性如来」七段「所謂諸法空。與無自性相應故」理趣釈二段「證得四種圓寂。所謂一者自性清浄涅槃。二者有餘依涅槃。三者無餘依涅槃。四者無住涅槃」

(28) Sn 四章の 15 経。anitthuri ananugiddho anejo sabbadhī samo

## 二、類似性から見る構造

### (一)、それぞれの構造

ここでは Bhup と理趣釈、併せて最古の経、バガバッド・ギーター、そして宮坂先生が指摘されたガナ・サンガの宗教の構造を明らかにしたい。

#### 1. Bhup の構造

- ① (目的) 死と心の悲しみの克服
- ② (方法) カーマで (欲望と対象) を捨ててアートマンをカーマ (欲望) する。
- ③ (境地) 唯見る者であり多である個々物 (bahu) が解消された一なるものである。それは歓喜であり財を得る。
- ④ (罪業) アートマンとブラフマンは不増不減であるから罪を被らない

#### 2. バガバッド・ギーターの構造

- ① (目的) 肉親である敵を殺すべきか
- ② (方法) カーマを捨て神を信じて全身全霊を捧げ愛し愛され、何も期待せず企図せず自分の義務に従う。義務とは自性であり生れでありカースト (ヴァルナ) である。
- ③ (境地) 敵対せずその人は神に至る。<sup>(29)</sup> 慈悲あり、私がとか私のものという思いなく、苦と楽は同一平等と見て、常に楽しく、自制し神にバクティを捧げる境地。万物に唯一不変の状態を認め、<sup>(30)</sup> 区別されたものの中に区別されないものを認める時、それが純質的な知識である。主宰者は種々の存在の心臓に居て、「回転からくり装置」に<sup>(31)</sup> 回転するものがあたかもあるかのように見えるように種々なるものを<sup>(32)</sup> 回転して幻影させている。
- ④ (罪業) 行為は不可<sup>(33)</sup> 避だが行為の果報 (phala) を求めず無執着であれば (殺害も) 正しい。

#### 3. 理趣経の構造

- ① (目的) 即身成仏。欲界において涅槃しつつ衆生救済する。
- ② (方法) 理趣を知り曼荼羅に各仏を体感して俗世に試行錯誤して成仏する。
- ③ (境地) 衆生救済の大悲をもって衆生に接して心無休自他平等無二を保つ。この大欲を起点として大楽即ち大ビルシャナの境地に修行し続ける。
- ④ (罪業) 説者であるビルシャナ仏は既に煩惱とその習気を断じ福德智慧を円満して<sup>(34)</sup> 清浄法界は本来不染でありその性は不増不減である。三業は虚空のように清浄。ただし流転有情の煩惱を調伏する。適時に分別して無分別であり汚れない。

(29) バガヴァッド・ギーター 11 章 55

(30) バガヴァッド・ギーター 12 章 13,14

(31) バガヴァッド・ギーター 18 章 20

(32) バガヴァッド・ギーター 18 章 61

(33) バガヴァッド・ギーター 18 章 11

(34) 理趣釈初段 / 清浄法界本来不染。與無量雜染。覆蔽異生無明住地。其性亦不減。預聖流證佛地。其性亦不增加。

## 4.最古の経のブッタの肉声の構造

- ① (目的) 自分が殺すことを通じて人々が敵対し合うこと苦を背負う。
- ② (方法) その原因である見えない矢を抜く。神や超越論など一切を措定しない。
- ③ (境地) 相手の痛みを知る、人々がぶつかりあうことを共感受苦して同じ立場に立つ。カーマを克服し、あらゆる場所にあらゆる人々と対等平等で親和（一切所平等平安）する。
- ④ 冒頭肉声偈はぶつかりあいを停止して罪は一切起こさない。衆生救済する。SN1-3-4のように弟子であっても適時に分別無辺別を行うから涅槃を損なわない

## 5.ガナ・サンガの宗教

- ① (目的) 種族共同体ガナ・サンガの維持<sup>(35)</sup>
- ② (方法) 種族の宗廟の先祖霊である樹神 yakkha、竜 nāga、などをまつる
- ③ (境地) 老人、子女を守り、多くの人からなる合議をもととし共に生きる
- ④ 来訪の修行者を保護し共に生活する。差別を嫌う。

# 三、比較から見えてくる理趣経

## (一)、不死と登場人物

スッタニパータ第四章⑤経のブッダは不死や死後の世界や常住存在を説いていない。<sup>(36)</sup> 即身成仏である。Sn 第五章はブッダの死後を問う。「悟った者はどうなるのか」。第五章の結論は「ブッダはどこにも見られない」であり、「死に神に把捉されず空である」「無色である」「意識はない」など幾多に考究される。それは SN1-4-4 の「天界にもどの世界にも見られない」につづく。そして不死の一つの答えが一切智智や一切如来である。不死を説くことは常住存在の誘惑に等しい。ウパニシャッドは常住存在であるブラフマンを想定する。理趣経はブッダが否定したウパニシャッドのブラフマンの代わりに常住者として一切如来を想定することとなる。それは Sn 第四章 11 経に萌芽が見られ Sn 第五章では大いに議論されるがその段階では「(涅槃に到ったものは) 見られない」とのみ記述される。法界の常住は相応部で初めて説かれる。その以前には SN5-10 に「あるのは五蘊であり有情は居ない。あるのは苦しみのみである」と説く。法界の常住、苦の常住、そして涅槃（智慧・般若）の常住。

ブッダは自分の死後や宇宙の無限性に対して無記であった。しかし理趣経は最初に在るもとしての一切如来あるいはその智慧を想定あるいは仮定する。<sup>(38)</sup> そして衆生救済の実働を保障するために、一切如来がビルシャナを灌頂して三界主となし、彼をして金剛薩埵に教示せしめて、金剛薩埵に衆生救済させるのである。そのために大樂大貪染を説く。こ

(35) 宮坂宥勝「仏教の起源」「ブッダの教え」

(36) 「武器を手にする経と死後を憂う経の比較により釈尊の原体験を特定する」(普通寺教学振興会紀要 21 号)

(37) 相応部 12 因縁相応 第 20 経「縁」(paccaya) に「如来が出現してもしなくてもこの界は存続する。法は存在し法は決定され法は縁起する thitāva sā dhātu dhammaṭṭhitatā dhammaniyāmatā idappaccayatā」

(38) 曼荼羅の建立自体仮定的である。理趣経四段に「所謂一者自性清淨涅槃。二者有餘依涅槃。三者無餘依涅槃。四者無住涅槃。前三通異生。」とあり外道でも自性として涅槃を有すとあるのは証して後のみ分かることであり仮設的である。



れが理趣経である。この一切如来→ビルシャナ→金剛薩埵の関係は既に見たようにブラフマン→クリシュナ→アルジュナの関係と類似であり、権化 (avatāra) の考え方であり、八百万の神は全てビルシャナの化身であることとなる。しかしながら理趣経の構造は唯識であり、人間存在を五智に分析しつつその総体をビルシャナで示したものであるから、権化とか化身といっても識や智の展開<sup>(39)</sup>である。

## (二)、理趣経の教主

理趣経の教主は婆伽梵である。密教ではビルシャナが最高位の仏とされているがそうとは限らない。読み方によれば、「バガバーンは私があるときに聞いたのだが、このときは殊勝一切如来金剛加持三摩耶智を成就して已に一切如来が灌頂する寶冠を得て三界主として……欲界の頂点の他化自在天で説法した」とあるのであり、この読み方によればビルシャナは誰かに加持された存在であり、誰かの下位の存在である。誰かとは、SN1-4-4 では「(制欲によって罪を断ちカーマをなくし慢心を脱した人であり)この縛りを断ち、苦しみなく、無願の人を、神々も人間もこの世にもかの世にも天上にもあらゆる住み処にも捜し求めたが到達できなかった」のであり、ブッダが仏果として「(六道などの) 死の領域に見られない」ことは Sn 第五章以後盛んに論じられることであり、死の領域には見られない誰かなのであるから、釈尊その人ということとなる。

ブッダは Sn4- ⑤経で「見えない矢を抜けば苦海に沈むことなく一切所に平等平安を得る」と記して「死の領域を脱した」とは明言していないが、逆にあらゆる場所で平安であると明言しているのだから死の領域を認めない境地に立ったといえよう。ブッダの滅後の弟子たちはブッダの不死・永遠であることを求める者が趨勢を決めた。というのは輪廻観の広まりが、ブッダの死後の在所の不明を不問にするよりは何らかの形で示すことを要請された。結果として「あらゆる所で平等平安である」というブッダの言明は弟子によって「死の領域に於ける不在」となる。

ブッダは何人居ても良かったし実際經典の数や内容から複数居たのだが、弟子たちは自分の悟りや時代への批判や示唆として「私はこう思う」と書く代わりに「あるときこのように聞いた」と書いてしまった。

そのように考えるならば、ビルシャナの登場は厭世的仏教が主流を占めて「一切皆苦」が蔓延る流れの中で、その現世否定に抗して再度「この世を含めたあらゆるところに平等平安」というの原初のブッダ思想を蘇らさせ反撃したのであり、それは傍流あるいは底流に流れる当然の流れであった。

## (三)、説所の問題

理趣経の説法の場所は欲界である。後代の仏教では三界は常識であるが、ブッダの時代にはそのような区別はなかった。あるいは別の説明でされていた。

分かりやすいのは無色界であり、その説明が最初になされるのは Sn4- ⑪経である。カー

(39) 真言宗では六大を説く。色が物質なのか識の対象なのか明白ではないが、色が物質とするなら権化は人格的なものとなる (加藤精一先生説)。

マの成立を接触（諸事物との関わり・経験）に求め、欲求が色の広がりや妄想すると説明する。ここには明確に欲が色をつくり出すという発想が見える。そのことはSN1-4-4に成つてより明確に簡潔にまとめられている。この発想によれば欲が消えれば色は消える。あるいは色を展開（prapañca 戲論と同じ語）することを停止すれば、欲は残存しても色は消える。ただし欲が常に対象を持つと考えるならば欲と色は同時に存在し同時に消滅する。ところが欲の消滅したブッダが常住することを期待するならばブッダの身体である色は残存する。あるいは生存中に無欲となったブッダの身体たる色は現存する。この色が滅するのはパリニルバーナつまり入滅後である。こうして三界が成立する。

であるから欲界で説法するということは、欲を肯定するというのが主眼ではなく、この世の仏教を説くという意味である。そもそもSn4-⑮経の肉声ブッダにしてもSN1-3-4などの弟子にしても、衆生救済の欲を持っていて、衆生の苦を共感するたびに欲は発動する。それが分別無分別<sup>(40)</sup>である。時に救済のために分別し、時に涅槃のために無分別である。

説法が欲界であることの意味は、一切皆苦を説き始めた厭世主義者への反逆である。それは説法するブッダへの回帰である。一切所平等平安（自他平等無二）に生きることに積極的に意味を見出そうとする現世復活の営みである。アートマン思想という誤認思想に偏った厭世仏教批判である。そもそもブッダ自身の思想がヴェーダやウパニシャッドの思弁とその弊害への抵抗運動でもあったことは先の拙論<sup>(41)</sup>で明示した通りである。

#### （四）、教主の資格と大楽大貪染の大が付くこと

ビルシャナは灌頂を受けて三界主となっている。この灌頂を有力な武器として密教は弟子を教化できるとする。灌頂とはそもそもは権威のない王を王たらしめる架空の儀式であることは周知である。一切如来あるいはその智慧（一切智智）が主体となってビルシャナを三界主に仕立て上げ、その三界主がわれわれを金剛薩埵に仕立て上げる。その内実は「大楽大貪染説」である。清浄句はこのように説明される。

理趣積初段 / 由如上智能斷三界九地見道修道一切煩惱及習氣。斷二種障。二種資糧圓滿也。

「妙適清浄句是菩薩位」と言い「大楽大貪染」と言いつつも、煩惱とその残余影響を見道修道において断ち終わっていて且つ善行を蓄積して智慧を完成している人のことであって、修行を終えていない未熟者が言っているのではない。そのことは百字の偈に明言されていて「涅槃に行く資格のあるものが涅槃に行かずに衆生に涅槃を教える」のである。涅槃を得ていないものが説いているのではない。つまりブッダが説いているのと等しいのである。故に当然のこととして、金岡秀友師などが言う欲望肯定などではありえない。

煩惱を断って涅槃を保ちながらいかにして衆生救済が可能か。あるいはもう一步進んでブッダが「ラーマニー」と入ったヴァーサリーの楽しみに似たウパリやジーヴァ救済の喜びがいかに可能か、法楽の楽しみがいかに可能かを追求しているのではないか。

(40) 理趣積二段、一切業平等現等覺以大菩提一切分別無分別性故者。由如来無漏五識。與成所作智相應。現三業化。於淨妙國土及雜染世界。任運無功用無分別。作佛事有情事。

(41) 4 最古層経の無記無分別を解明しブッダの科学的思考と平等の趣意を解く」（善通寺教学振興会紀要 23 号）

(42) 山崎元一「世界の歴史 3 古代インドの文明と社会」王とバラモンの共謀としての灌頂。

理趣經初段 / 能作一切如來一切印平等種種事業。於無盡無餘一切衆生界。一切意願作業。

皆悉圓滿。常恒三世一切時。身語意業金剛。大毘盧遮那如來。

理趣積において薄伽梵は毘盧遮那自覺聖智也であり五仏であると説明されるが、三界主となったのちに、常恒三世一切時。身語意業金剛。大毘盧遮那如來となる。修行中も仏果を得たあとも両方通して一切時に、身語意の三業が金剛であるからビルシャナではなく大ビルシャナ<sup>(43)</sup>である。大ビルシャナは成道以前の自分と自分以外の修行者たちの全てを含むから一切衆生を包含する。また何故ビルシャナではなく大ビルシャナかという点、

理趣積初段 / 能作。由獲瑜伽自在故能作。一切如來。五佛亦如前釋。一一佛皆有一切印平等羯磨處智。遍至無盡無餘佛刹衆生界。能作種種利益。究竟安樂一切有情界悉令圓滿。上中下。一一皆成九品悉地。

理趣積初段 / 金剛者。證得佛地一切法自在。得證身口意三密金剛。於藏識中。修道煩惱習氣。堅若金剛難摧。用以大空金剛智三摩地。證得法身光明遍照毘盧遮那如來也。

とある。大ビルシャナは衆生の利益を満足するために欠かせない瑜伽が自在である。瑜伽とは衆生の各々の場所と時に応じた願いを満足させるカルマに瑜伽するという点である。その時その時に衆生が何を願い何を必要としているかを察してそれに対して行なうことができるという意味であろう。大日経ではあらゆる衆生の一一の心（百六十心）を知ると説かれる。大ビルシャナはあらゆる衆生の心を知っている点であり、且つ、自他平等無二であるから一切衆生心そのものである。言い換えれば無始以来の輪廻を無限に繰り返して衆生救済した釈迦の総体であり、全ジャータカである。

問題はアングリマラという盗賊が居て強盗行為を願っている時に、その悪行を満足させることが良いかどうかである。衆生の罪ある願を成就させるのは戒律違反である。戒律に反せず涅槃を損なわず、そして涅槃を成就するに資する事柄は衆生済度といえようが、ここでは言及されない。もっと言えば、理趣積が説くのは曼荼羅への入壇と灌頂等儀式であり、それ自体で教説が完結するのか、または、それは端緒であってそののちの実生活は別の所で説くのかは私の力の及ばないところである。

ここで言えることは瑜伽自在とは、各衆生の各時節においてその願に瑜伽するからビルシャナではなく大ビルシャナであるということである。瑜伽とは如来の智慧をもって各衆生の具象に当たるということである。

そこでビルシャナではなく大ビルシャナは貪染ではなく大貪染を金剛薩埵に説いて妙適の行＝衆生済度へと勧誘するのである。このことは理趣經 17 段に大欲がどのように衆生救済をするかの過程が説かれることで明らかとなる。

理趣經 17 段 / 所謂、菩薩摩訶薩大慾最勝成就故。得大樂最勝成就。菩薩摩訶薩大樂最勝成就故。則得一切如來大菩提最勝成就。… 則得一切如來摧大力魔最勝成就。… 則得遍三界自在主成就。… 則得淨除無餘界一切有情住著流轉。以大精進常處生死。救攝一切利益安樂最勝究竟皆悉成就。何以故

大欲→大樂→大菩提→摧大力魔→遍三界自在主→淨除無餘界一切有情住著流轉→大精

(43) 津田真一「半密教学」

## 進→一切利益安楽

最後の二項目は読み方によって意味が異なってくる。

①有情界を清浄たらしめて流転を停止させれば→何でもかんでも衆生はやりたい放題

②有情の流転の因である貪欲などを停止して→ブッダ本来の幸福をもたらす

ここは先に示したように、三業は虚空のごとく清浄とはいえ、理趣釈三段に「爲調伏貪等三毒也」とあるように大三毒ならぬ三毒は苦の因でありそれを退治するのが衆生済度であるから①やりたい放題の煩惱肯定ではなく②ブッダ本来の幸福追求と読むべきである。

以上、楽と大楽、欲と大欲、貪染と大貪染とは意味が異なる。その意味は、

①大欲は、衆生済度の欲を持ち自他平等の境地を保つ。

②大欲は、一切皆苦を説く厭世主義の唯我涅槃者を批判し、この世の衆生救済などの楽しみを積極的に認め、また理趣に叶う喜びを認めるのであり、それは肉声のブッダが説いたように、ぶつかりあい奪い合う苦しみを導く見えない矢を抜いた生活を肯定するものである。例えば在家信者の妻帯を禁止していない。人身や動物の売買や濡れ手に粟の商売繁盛は認めないが、不殺生不偷盗などの奪い合い殺し合うなどの行為を避けての一切所平等平安の生活は否定していないのである。

## (五)、自他平等について

### (1)、ブリハッド・アーラヌヤカ・ウパニシャッドの自他平等

Bhup4-3-31/ 他者が居るならば、そのときはもう一つの者がもう一つ別のものを見るだろう。臭うことも味わうことも語ることも聞くことも思考することも接触することも認識することもあるだろう。 *yatra vā anyad iva syāt tatrānyo 'nyat paśyed/*

Bhup4-3-32/ 彼は水の中にある、一なるものであり、二つからなるものではない、見る唯一者である。これがブラフマンの世界である。……これこそ最高の目的地、成就、世界である。最高の歓喜 (*ānandaḥ*) である。

ヤージュニャヴァルキアのブラフマンの世界は存在論的には見る主体のみが唯一存在しその他は存在しない。だから自他無二なのである。ギターでは明白であり、ブラフマンが幻力マーヤーによって旋火輪の如くはないものを見せているのである。もともと私たちの個々別存在は存在しない。自他平等というより他は我に帰属する。他を我が物とするなら、まさにブッダがもっとも嫌った私物化である。

### (2)、理趣釈の自他平等

理趣釈の妙適はこのことを明白に説示する。アカーマではなく、カーマを衆生に置き換えるのである。欲は大悲であり、対象は衆生である。大洪水の譬喩を用いるならば、大悲の激流が衆生をして救済対象たらしめるのである。であるから厳密にはカーマは衆生ではなくて救済である。福德の積善に没頭するからアカーマに準ずるものとなり無分別に準ずるのである。

詭弁かもしれないが、衆生を愛するのはカーマであるが、衆生救済の救済は正に自身自身のなかに起こる出来事である。自分の貪欲は離欲や制欲によってアカーマとなる。だが他人の貪欲や苦はどうか。衆生病むが故に我も病むを仏説とするならば、救済と共に病んだ自分を救済することである。その病気はいかにして止むか。互いに離欲すること。あるいはブッダのように入団させて共生すること。在家信者を癒すこと。これ以外には止むことはない。このように考えれば救済とは自他平等において自他の苦を抜くことと等しい。理屈ではなく事実として救済活動をしているひとは我欲を減らし同情を肥らせ自他同価値の価値観の上に行動する。同価値とは欲得を均一にしようとする営みである。ここにマヤーは幻影でありながら自分以上の存在感をもって現実化する。このとき発動するのが理趣釈二段の「能縁所縁平等平等。離能取所取故」「一切分別無分別性故」であり自他平等無二において分別と無分別を適時に行う、あるいは、分別が無功用無分別として発揮されて、涅槃にありながらアカーマの状態で衆生に共感して救済がなされるのである。

### (3)、Sn4- ⑮経肉声ブッダの自他平等

拙論のように、ブッダは剣を振り上げて相手を殺害しようとしたが恐れて留まる。何を恐れたかという、人々が小水の魚がぶつかりあうように奪い合うことを恐れたのであり、相手の痛みを感じて恐れたのである。それはギターのアルジュナを参考にしたい。まさに衆生病むが故に我も病むである。相手が痛むが故に我も痛むである。ブッダは存在論的には他者が存在するから、彼の心と共鳴して平等化するのである。この点が Bhup やギターとは根本的に異なる。ギターでは最初の問題であった敵の存在が途中から捨象され、ついには、他者は幻影であり存在しなくなる。理趣釈では、他者は存在する。しかし大ビルシャナの立場では他者=我であり、他人と自分が同時存在として存在する。

## 四、結論

### 理趣釈の即身成仏

即身成仏とは、死ぬまでもなく生存中に（この世ある世を問わずあらゆる在所で）自他共に涅槃する。その心境は自他平等無二でありブッダの一切所平等平安に等しい。

①修行者が金剛薩埵になった振りをして修行する。金剛薩埵とは一切如来に灌頂されたビルシャナによって灌頂された修行者である。

②金剛薩埵は妙適を行う。妙適とは三毒(カーマ)を消滅させて、アカーマの状態となり、衆生救済を唯一の目的として生きるものであり、その境地は自他平等無二である。

③金剛薩埵は修行を通してビルシャナに成る。ビルシャナとは二種障断じ二種資糧を円満した者でありブッダに等しい。ビルシャナが修行時代を含むとき大ビルシャナになる。何故かというビルシャナが衆生救済を行うとき、各衆生の各苦悩に共感しつつ自他平等無二であるからビルシャナの涅槃は損なわれて各衆生の苦難の状態に変化する。故に衆生の数だけの心を遍歴することとなり、あらゆる修行時代を含む大ビルシャナとなる。

④罪業不問（殺害容認）の意味は「衆生救済とは衆生の三毒を破碎すること」である。金剛薩埵は衆生の危機に応じて分別と無分別を適時に繰り返して衆生救済を行って大ビルシャナの範囲内を遍歴修行する。

⑤無自性問題。自性に拘れば差別が起こる。秘蔵宝鑰第九住心に無自性故去卑取尊に依拠すれば無自性こそ変革の土台であり衆生救済達成の約束なのである。

## 問題点①曼荼羅の限界

⑥問題点として、理趣釈となるとバガバーンが灌頂されて三界主になったように、私も曼荼羅壇をこしらえ灌頂されて仏になる。それは菩提そのものなのか、それとも菩提の契機なのか。

私は金剛界次第を念誦しては利他行実践をして念誦法と実践の反復を何年間も繰り返して仏の果報があったと実感する。真言行者は金剛界念誦法などを一度でなく何度も何度も繰り返す。そのとき我は金剛薩埵なりという心境が醸成される。その境地によって衆生救済を実践して次第に大ビルシャナを完成していく。実際に空海大師は念誦法を行なって遍照金剛と成り綜芸種智院などで自他平等無二を發揮する。その念誦法と衆生救済の実践の両方を瑜伽（両者をつなぎ留める）させるのがこの理趣である。

## 問題点②慈悲欠

⑦自他平等の境地と差別の現実という乖離とそれを埋めるための妙適

端的に言うとは殿上人と庶民、有閑マダムと派遣労働者の思想の乖離である。ウパニシャッドもギリシャ等哲学も観照思想であるという指摘がある。労働を奴婢や奴隷に押しつけて有閑時間をいかに過ごすかにおいてなかならず有能なものは思想を発展させたが何れも類似性がある。それらは「眺める」「見る」「考える」ことに終止する。

ヤージュニャヴァルキアは学者として労働しないのだから他者は実働者としては居てもいなくても同じである。だから唯見るのである。アルジュナは実際に戦争する。

片や、ブッダは小さなガナ・サンガの構成員である。老人や子女をいたわり外来者を大事にしたというからいっしょに働いていたが、ある日、マガダとコーサラ帝国に侵略される。ブッダは傍観者では居られない。武器を手にとり、家族を守り、他の崩壊していったガナ・サンガの上部構成員が辿ったように沙門<sup>(44)</sup>となったのである。そして伝記では終世、悩める人や行き場のない人々の相談に乗りサンガに迎え入れて共同生活が成り立つように腐心し労働した。彼にとっては他人の悩みを共感受苦しめて共に解決する日々の営みが一切所平等平安であった。自性清浄自他平等無二ではなくて無住所自他平等無二として。

つまり自他平等を観照するにとどまらず自他平等を実践するのである。自分が思うだけでなく敵にもそう思われるということである。

(44) 宮坂宥勝「仏教の起源」